

柳生  
非情劍

隆慶一郎

新裝版





講談社文庫

新装版

# 柳生非情劍

隆慶一郎

講談社

しんそうばん やぎゆう ひ じょうけん  
新装版 柳生非情剣

りゆう けいいちろう  
隆 慶一郎

© Mana Hanyu 2014

2014年1月15日第1刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに  
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——豊国印刷株式会社

製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277730-8

目次

慶安御前試合（柳生連也斎）	9
柳枝の劍（柳生友矩）	51
ぼうふらの劍（柳生宗冬）	89
柳生の鬼（柳生十兵衛）	127
跛行の劍（柳生新次郎）	161
逆風の太刀（柳生五郎右衛門）	199
あとがき	226
解説 小柳治宣	229



講談社文庫

新装版

# 柳生非情劍

隆慶一郎

講談社



真名へ





目次

慶安御前試合（柳生連也斎）	9
柳枝の劍（柳生友矩）	51
ぼうふらの劍（柳生宗冬）	89
柳生の鬼（柳生十兵衛）	127
跛行の劍（柳生新次郎）	161
逆風の太刀（柳生五郎右衛門）	199
あとがき	226
解説 小柳治宣	229



# 柳生非情劍



慶けい安あん御ご前ぜん試じ合あい



## 鯉

柳生石舟齋から新陰流三代の道統を授けられ尾張柳生の開祖となつた兵庫助利嚴は、何よりも花を愛し、庭を愛したと云う。

別して慶安元年（一六四八）正月、隠居して如雲齋と号するようになったからは、一日はまず花を活けることから始まり、庭の仮山水を見廻ることではほとんど半日を過ぎた。巨石を集めて山と見立て、その下に清泉を引いて盆池を形どり、そこに鯉を放つていた。池のほとりに立つて、半日、鯉の動きを見て倦きることがなかつたと云う。時々まるで自分が鯉になつたようなことを云つた。

「この曲り鼻の岩が、どうもこわいな  
とか、

「この辺が変哲なさすぎて倦きたよ」

そんなことを云い立てては、庭師に手を入れさせ、時には手ずから直したりする。如雲齋の三男兵助は、この父の趣味が大嫌いだった。花はまだいい。立花は芸の一つであり、武人の風雅として悪いものではない。だが仮山水の方はどうにもいただけない。とりわけ、半日の余も池畔にしゃがみこんで、痴呆のように鯉を見つめている姿には、老残という言葉の、何かぞつとさせる感じがあつた。

「鯉のどこがそんなに面白いのですか」

ある日、むきつけにそう訊いたことがある。如雲齋はきよろつと兵助を見返した。眼が死んでいゝ。兵助の質問が理解出来ずにいるのは明白だった。

「面白いから、半日、鯉を見ていられるのでしよう？」

兵助の言葉には突つかかる棘がある。父のこんな姿を見たくないのだ。

「鯉でなくてもいい」

如雲齋の応えは模糊としていた。瞳に茫々の気が漂っている。

「魚になるのが楽しいだけだ」

「魚になる？」

兵助が呆れて云つた。

「泰山を仰ぎ、江淮を泳ぐ。島陰をめぐつては、水底に潜み、また花影のただよう水



面に浮上する。人間には魚の楽しみがないな」

「泰山ですって、この小さな岩が？ この池が江淮といえますか」

「魚は大小を忘れて楽しんでる。観ずれば仮山水もまた真の山水となる。お前には魚の気持は分らん」

それきりだった。父の姿勢がそれ以上の質問を封じていた。

〈魚の気持なんて、分りたくもないさ〉

兵助は腹の中で毒づきながら、引き下らざるを得なかった。

兵助は後の浦連也れんや、柳生連也齋である。

如雲齋には男子が三人いた。清嚴きよよし・利方としかた・連也である。ちようど五歳ずつ齡が違

う。

長男の新左衛門清嚴は、父とは別に小姓役として三百石の扶持ふちを受けていたが、寛永十四年、たまたま病いのため静養中だった有馬の地で、島原の乱の起つたのを知り、何も彼もなにか抛なげつて参加した。恐らくはこれがこの時代の最後の合戦になるであろうことは、何人の目にも明白だったからである。この機をのがせば、一生人を斬る機会がなくなるかもしれない。斬人の劍を勉まなんだ者として逃がすことの出来ない場合だった。清嚴は、最初の原城総攻撃に加わり、